

アンドレ・ジッド『贋金つかい』の草稿 および関連資料に関する調査プロジェクト

白 岳 エリコ

フランス文学専攻 前期課程 1 年

1. はじめに

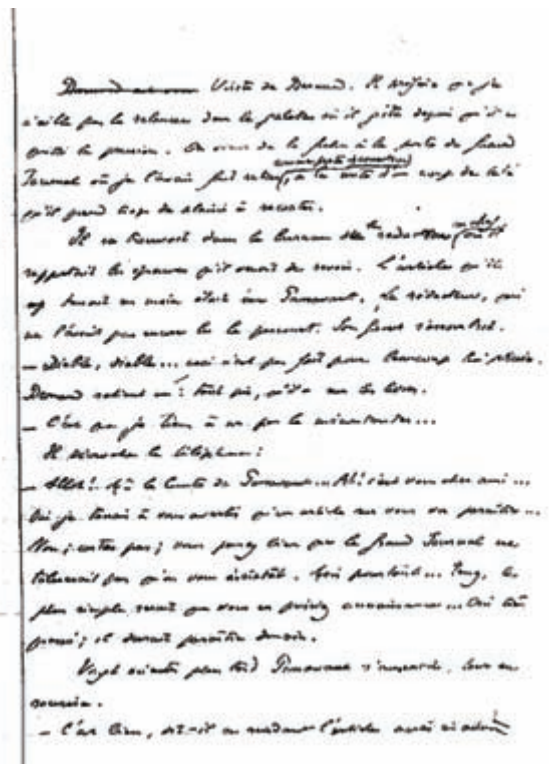
報告者は、2007年9月18日(火)から9月30日(日)までの13日間、フランスの首都パリにあるフランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France) において、「アンドレ・ジッド『贋金つかい』の草稿および関連資料についての調査プロジェクト」をテーマとしてフィールドワークを実施した。以下に調査結果の報告を行い、それをふまえたうえで『贋金つかい (Les Faux-Monnayeurs)』(1925年発表、翌年出版)についての考察を加えることとする。

2. 本調査の目的

今回の主な調査対象である『贋金つかい』の自筆草稿は、長らく個人の所有下にあり、この間その内容については知ることができなかった。しかし、2001年にフランス国立図書館が競売にかけられたこの草稿を落札したことで、ようやく研究の対象とすることが可能になったのである。ジッドの代表作である『贋金つかい』は、小説の生成過程を中心的なテーマとして扱っているが、この作品自体がたどった生成過程については、ほとんど明らかにされていない。これまでは、『贋金つかいの日記 (Le Journal des Faux-Monnayeurs)』(1926)と題された製作日誌や、ジッドの『日記 (Journal)』を通して生成過程の解明が試みられてきたが、そこに見られる記述が非常に断片的で限られたものであること、また、これら二つのテキストがともに「日記」という呼称を持ちながらも、一つの作品として読者を意識した形で出版されていることがその原因であるといえるだろう。本調査は、『贋金つかい』の草稿の検討を通じて、この作品の生成過程の新たな側面を発見し、そこに秘められた意味について考察することをねらいとしている。

3. 『贋金つかい』草稿

今回調査の対象としたジッドの草稿は、『贋金つかい』の結末部に当たるものだが、これには決定稿にはないエピソードが含まれている(図版1)。それは、ベルナルがエドゥワールを訪ね、自分が新聞社を辞めて父親のもとに戻ることに決めたいきさつを語るというものである。小説家であるエドゥワールは普段から日記をつけているのだが、そこに書かれたこととしてこのエピソードが描かれる。



図版1 草稿(ベルナルの訪問を扱ったものの一部)
BNF, département des Manuscrits, N.a.fr.26960 « Brouillons, notes », f.40.¹⁾

上に示した草稿はジッドがノートに書き記したものである。以下にこのエピソードの前文を訳出する²⁾。

[ベルナルがやって来た] ベルナルの訪問。彼は、寄宿舎を出て以来寝泊りしているぼろ家に戻らなくてもいいように私がとりはからうことを望んでいる。以前私が〈職工長兼校正係としての〉仕事を紹介してやった『グラン・ジュルナル』から追いつかれたところだったが、その原因となった無分別な行動について、彼は嬉々として語った。

彼は〈主筆として〉編集室で働いており、そこに見直したばかりの校正刷りを持ってきた³⁾。

彼が手にしていた記事は、パッサヴァンについてのものだった。

編集者は、まだこの記事を読んでいなかったの、それにぎっと目を通した。

彼の表情が曇った。

——こりゃ、まいったな……これじゃ彼はちっとも気に入らないだろう。

ベルナルは一枚の校正刷りを留め置いた。しかたない、と彼はつぶやきかけた。

——彼に不満を抱かせたくはないからな……

彼は受話器を取った。

——もしもし、パッサヴァン伯爵を……ああ！あなたでしたか……ええ、あなたについての記事が載ることをお知らせしたいと思ひまして……いいえ、違います、あなたを酷評した記事を『グラン・ジュルナル』は受け入れないとお思いでしょうが……ねえ、一番簡単なのは、よくお読みになることです……ええ、時間がありません、明日には間違いなく載るでしょう。

20分後、パッサヴァンが笑みを浮かべてやってきた。

——よかったですよ、と彼は記事をろくに読みもせず返して言った。もしこの記事が載ったら、すべきことは分かっています。

——まあまあ……私はこれを書いた者を知っています。〈昨日はまだ、彼は最も感じのよい仕方でああなたについて話していましたよ……〉

確かに、いくつかの表現は彼の考えていたものとは異なっていた。

——変えてしまうしかないね。

——彼にそうするよう言ってみましょうか…… [ねえ、一番簡単で、時間を節約することができるのは、あなたが自分で変えてしまうことです。] パ

ッサヴァンは「時間を節約するために」、自分でこれらの表現を変更しようと言った。

新たにかかってきた電話によって、執筆者からどっちつかずの承諾を得たので、パッサヴァンはすぐさまそれを濫用し始めた。付加形容詞のついた賛辞の前で、彼は「少し」を「非常に」へと変えた。親指で軽くたたくと〈それらの形容詞が〉いくつか消され、賛辞はいっそう大きなものとなった。パッサヴァンはそうして手を加えた校正刷りを、彼とは気づかずベルナルに手渡した。ベルナルは何も言わずにそれを受け取った。

——あなたは僕がその通りにしたかどうかお考えですね。

——で、記事は？

——載りましたよ、もちろん、修正せずにね。パッサヴァンは怒っていましたよ。

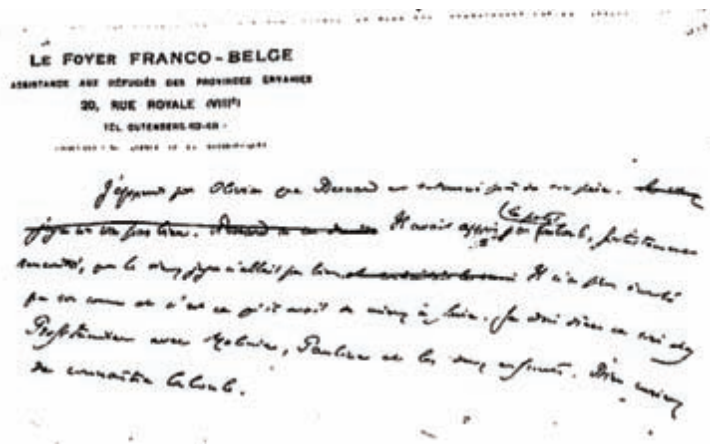
編集者は自分に非がないことを主張したので、すべて「怠慢な」職工長、つまり僕に責任が降りかかってきたというわけです。

こうして、彼にはまた働き口がなくなった。しかし、新聞社を首になった同じ日に、彼は長いこと会っていなかった弟のカルーブに出会ったのだった。少年はベルナルに再会して大変感動していたので、ベルナルのほうも嬉しさを隠すことができなかった。ベルナルが尋ねたので、少年は彼に [ゾロフィタンディウー] 〈老判事〉の体調が良くないことを告げた。肝臓の発作が以前よりも激しくなり [なったように思われ]、病床についていたのだ。その時、断固とした意志を忘れたベルナルは、もはや自分の心の声しか聞けなかった。彼はプロフィタンディウーのところへ駆けつけ、その腕の中に飛び込んだ……

——それで私は、彼が私に言ったことを理解した、〈贗の父親〉[養父] は多くの場合において、本当の父親よりも優っているのだ、と。

何度かの訂正の後に、最初のタイプ原稿では、このエピソードの後に「FIN」の書き込みが加えられている。しかし、先述したように、決定稿では結末は異なったものになっているのである。

結末部分の生成過程については、Marie-Odile Germain によって検討がなされており、それによれば、現在見られる結末の原型が現れるのは、Le Foyer Franco-Belge (ジッドは大戦中、この施設でシャルル・デュ・ボスやヴァン・リセルベルグ夫人らとともに、



図版2 草稿

BNF, département des Manuscrits, N.a.fr.26960 « Brouillons, notes », f.60.⁴⁾

ベルギーや北フランスからの避難民の受け入れに協力していた)の判が押されている紙片においてである(図版2)。この紙片も、先に示した草稿とともにフランス国立図書館に所蔵されている。訳出したものを以下に示す。

オリヴィエから、ベルナルが父親のもとに帰ったことを知る。[老判事の体調が良くないのだ。ベルナルは]彼は偶然出会ったカループ〈少年〉から、老判事の体調が良くないことを知らされ、[帰ることを望んだのだ。]彼はもはや自分の心の声しか聞かなかったが、それは最善の方法だった。今晚プロフィタンディウのところ、モリエとポーリーヌ、その二人の子どもたちと食事することになっている。私は、カループという少年に大いに興味を感じている。

以上、二つの草稿の内容を比較してみると、ベルナルの帰還がエドゥワールの日記を通して語られる点は共通しているが、両者に決定的な違いが存在していることが分かる。Le Foyer Franco-Belgeの草稿では、ベルナルがエドゥワールを訪ねる場面が全く描かれていないのである。そのため、先の草稿および最初のタイプ原稿に存在していた『グラン・ジュルナル』でのエピソードがそっくり削られたというばかりでなく、ベルナルの帰還についてもオリヴィエから聞いた話として間接的にしかふれられていない。また、エドゥワールが示す反応もかなり違ったものになっている。この草稿の内容は、多少変更を加えられはするものの、決定稿で採用されている。

4. 考察と今後の課題

以下では、報告者が以上の調査から得た結果に基づいて考察を行う。『グラン・ジュルナル』のエピソードが決定稿に存在しないというのは先に述べた通りだが、これについて検討することは決して意味のないことではないだろう。というのは、このエピソードが削除された理由の考察を通して、ジッドが『贗金つかい』という作品に与えようとしていた意味をうかがい知ることができるからである。このエピソードには草稿のうちのかなりの部分が充てられ、詳しく描写されているが、そのためにはエドゥワールがベルナルから直接この話を聞いたという設定にする必要があったと考えられる。というのも、他の登場人物のうち誰かから間接的に聞いたということになれば、ベルナルとパッサヴァンの会話をそのまま引用するような形で取り入れるのは難しいし、さらにはそれを語ってくれる人物を登場させなければならないからだ。

だが、ベルナルから直接語られるとしても、そこには別の問題が生じることになる。それは、「焦点」についての問題である。ジッドは『贗金つかい』において多くの人物を登場させているが、彼らに対する焦点の置き方は決して一様なものではない。その顕著な例がローラという人物である。ローラは作中で重要な役割を担っているにもかかわらず、『贗金つかい』の後半部分にはほとんど登場せず、手紙や回想などで間接的に言及されるだけである。彼女に代わって重要な位置を占めるのが妹のサラであり、ベルナルを中心とした筋の展開に大きな影響を与えている。『贗金つかい』においては、筋を展開する上で重要な人物に

次々と焦点が移されていくのに対し、役割を果たし終えた人物は背景へと退くのである（その点において、『日記』を通じて重要性を保ち続けるエドゥワールは例外的な存在といえるだろう）。

パッサヴァンとベルナルルに関しても、これと同じことがいえる。パッサヴァンはヴァンサンやオリヴィエが中心となる筋が展開する上で重要な人物なのだが、この二人が彼のそばを離れるととたんに彼はその影響力を失う。パッサヴァンの後を引き継ぐのはストゥルーヴィルルで、彼の登場によって物語は収束に向かう（11章の最後で、彼ら二人が会話する場面は象徴的である。会話の主導権を握っているのはストゥルーヴィルルであり、パッサヴァンは彼を前にして優位に立つことができない）。その後、パッサヴァンはアルマンとオリヴィエの会話のなかでわずかに言及されるにとどまる。

ベルナルルの場合、冒頭では私生児であることに由来する自由をどのように行使するべきかという問題が、ローラやサラと出会ってからはどのように生きるべきかという問題が中心的なテーマになっている。しかし、14章で天使と格闘し、エドゥワールと話したことで、この問題については一応の結論が出されているといってもいいだろう。また、*Le Foyer Franco-Belge* の草稿では、ベルナルルの帰還のエピソードをより間接的に述べることによって、「カループという少年に大いに興味を感じている」という最後の一文の印象が強められており、作中にこそ描かれてはいないが、この少年が新たな中心人物となるであろうことを予感させている。

以上から、ジッドはその効果を計算に入れた上で、いわば過去の存在であるともいえるパッサヴァンとベ

ルナルルを中心とした結末ではなく、まだ十分に知られていないがゆえに未知の可能性を予感させるカループに重点が置かれた結末を選択したのだと考えることができる。

修士論文の執筆に向けて、一つの作品とその草稿ばかりではなく、それらを取りまく数多くのテキスト群を含めたかたちで研究を進めていくことが必要となるだろう。とりわけ、ジッドの場合は膨大な量の日記や書簡が存在するため、それらを正確に把握し、重層的に読み込んでいくことを今後の課題としたい。

注

- 1) 草稿類の写真撮影は許可されなかったため、ここでは Germain Marie-Odile, « Gide, Comment finir Les Faux-monnayeurs? », *Revue de la Bibliothèque nationale de France*, n° 11, 2002, pp. 19-25 の中の図版を用いた。
- 2) 邦訳は報告者による。また、執筆途中で削除された箇所は [] 内に入れ、削除線を付した。追加された箇所は < > 内に入れて示した。
- 3) 原文では, Il se trouvait dans le bureau [de la rédaction] du rédacteur < en chef > où qu'il rapportait les épreuves qu'il venait de revoir. となっている。
- 4) 注1)に同じ。

参考文献

- Germain Marie-Odile, « Gide, Comment finir Les Faux-monnayeurs? », *Revue de la Bibliothèque nationale de France*, n° 11, 2002, pp. 19-25.
- André Gide, *Romans : récits et soties, œuvres lyriques*, Bibliothèque de la Pléiade Gallimard, 1958.
- André Gide, *Journal des faux-monnayeurs*, Paris, Gallimard, 1927.
- 松澤和宏『生成論の探究：テキスト 草稿 エクリチュール』, 名古屋大学出版会, 2003.
- 『筑摩世界文学大系 ジイド；モーリヤック』 川口篤 [ほか] 訳, 筑摩書房, 1973.